

産学協働による 人材育成と大学教育の質の保証

昨年、創立100周年を迎えた成蹊学園。さらなる教育の質の向上や社会が求める人材の育成を目指し、本年4月から中期重点目標「中期ビジョン」を定めて新たな挑戦を開始している。本特集では、同学園の取り組みを「成蹊教育、第二世紀へのミッション」と題してシリーズで掲載。今回は第2弾として、「大学改革に関する講演会」と、「産学協働による人材育成と大学教育の質の保証」をテーマに開催した座談会の内容を紹介する。



- 出席者
成蹊大学 学長 亀嶋庸一氏
三菱商事 執行役員 コーポレート担当役員補佐（人事担当） 廣田康人氏
成蹊学園 アドバイザリーボード 中西寛子氏
●ファシリテーター
成蹊学園 常務理事（産学連携担当） 小川隆申氏

問われる大学の存在意義

小川 21世紀社会において、産業界が大学教育に期待していることは何ですか。
廣田 まず、米スタンフォード大がシリコンバレーを育んだように、日本でも大学が社会的な使命の一つは、生涯教育



中西氏

も重要だと思います。本学では自治体や地域社会の協力を得て、吉祥寺の街の課題解決に取り組むプロジェクト型授業（PBL）なども実施しています。小川 世界の潮流を踏まえて、中西さんご自身の大学教育のあり方をどのように展開していますか。
中西 世界の潮流は、オンラインエデュケーションです。インターネットを使うことで世界中の大学の講義を受けられるようになり、単位の取得を認

世界中で活躍できるタフな若者を 廣田氏 教える場から学び合う場へ変革を 中西氏

や世の中の仕組みを変えるイノベーションのプラットフォームになることです。次に、学生に徹底的な学びの場を提供し、課題解決や専門性を身に付けさせること。特に正解のない問題に自ら答えを出していくために、幅広いレベルアップの修得が重要です。さらに、グローバルに対応できる語学力や発信力、多様な価値観を

産学協働による人材育成

小川 本学が今年度から始めた丸の内ビジネス研修（MBT）は三菱グループをはじめ多くの企業にご協力ならびにご意見をいただき実現したもので、まさに産学協働で人材を育成していく長期的な展望に立ったイニシアチブです。プログラムです。参加企業としてこの取り組みをどう捉えていますか。
廣田 当社は今夏、経済学部と文学部の3年生2人を受

トータルな教育改革で自ら考え発信する人材を育成



亀嶋氏

基礎講演では、文部科学審議官の板東久美子氏が「大学改革に求めるもの」について課題を提起。それを受けて、成蹊大学

社会が激しい変化にさらされている現在、大学に求められるのは、課題を自ら解決する意欲と行動力にあふれたグローバル人材を育成することです。本学は2014年度から新カリキュラムをスタートし、PBLや本学の伝統である個性尊重・少人数教育を強化したゼミ必修制など、自ら考え発信する力と国際社会に対応できるたくま



小川氏

小川 中村の教育理念に共鳴した2人は物心両面を彼を支え続け、中村は1997年に実務学校を設立。その後開校した実業専門学校は、産業界に有為な人材の育成を目的とした学校でした。中村は当時の画一的な詰め込み教育を排し、教師と生徒の心の触れ合いを重視する少人数による個性尊重の人格教育

若者の意欲引き出す

中西 100年を超え、時間をかけて培われた伝統や実績、吉祥寺という土地にワンキヤンパスの恵まれた教育空間、そこに集う幅広い世代の多様な人間——これら3つの間（あいだ）こそ、成蹊学園の魅力の源泉だと思います。学生は大学にもっと多くのことを要求していいし、大学も積極的に活用していいような環境にも対応できる強さを身に付けてほしい。成蹊大学は学生や社会の要望に応えるべく、これからも様々な学びの機会を提供して、これと確信しています。

小川 歴史的にも産業界と結びつきの深い成蹊の伝統を生かし、本学の中期重点目標の一つに産学連携、地域連携の強化を掲げ、組織体制の整備とともに具体的な取り組みを開始しました。実社会と学生をつなぐプラットフォームとしての役割を担うべく、産業界としてキャンパスのある武蔵野市からご支援いただいたながら、学生が実社会と接する様々な学びの機会を提供していきます。本日はありがとうございました。

学生の主体性引き出す機会を提供 亀嶋氏 実社会と学生をつなぐ役割果たす 小川氏

亀嶋 最近の若者は内向き

必要なのです。今後も伝統と実績を踏まえ、産業界や地域との密接なつながりを生かして、本学独自の教育・人材育成に取り組んでいきます。